

囚われ入浴

※体験版※

※中略※

鬼灯は絶頂したが、手ぬぐいの動きは止まらない。相変わらず自身の全てを柔らかく愛撫し続け、鬼灯に腰が溶けるような愛撫を続けてゆく。

「ふあ、ああっ・・・やあ、やめ、あああ・・・っ・・・っ」

(これ、だめです、気持ちよすぎて、腰っ・・・！溶けそっ・・・！)

自身への愛撫も続けられるが、他の性感帯への洗浄も続けられている。ヌルつくタオルやザラザラの手ぬぐいが身体中を擦りまわし、上半身から迫ってくる愉悦にも耐えなければいけない。

「あっあっ！あああああっ！んあっ！はああ・・・！」

珍しく鼻にかかった甘い声を上げ、鬼灯が快楽に染まった声で再び絶頂を迎える。しかし、やはり獄卒の動きは止まらない。

「んうううっ！はあっ！も、ダメっ・・・やめ、はあ、はあ、ああああ・・・！」

絶頂した直後にも関わらず、獄卒たちの責めは止まらない。自身に巻き付いた手ぬぐいはズルズルと表面を刺激し、先端を擦る手ぬぐいがザラザラしたものに持ち変えられ、たっぷり泡を付けられて再び摩擦が再開されたが、柔らかい繊維のタオルと違って、その刺激は強烈だった。

「くあつ！あああつ！あああつ！」

拘束された手足の範囲で、鬼灯の身体が大きく跳ね上がる。

丁度良い責めから苛烈な責めに切り替えられ、絶頂感が一気に無理矢理押し上げられてゆく。射精した直後で敏感になっている自身へ強い刺激を与えられ続け、鬼灯は目の前が白くなるほどの鮮烈な絶頂を迎えた。

「あああつ・・・っつ！っくつ・・・！」

再び先端から体液が吐き出されるが、それに色はなく、ただ無色透明のものだった。

潮吹き絶頂は射精の絶頂と違って何度でも連続で極めることができるが、通常の射精よりも快感が強い。刺すような快感が走り、鬼灯の心をただただ屈服させてしまう。

ブルブルと鬼灯の太腿が激しく痙攣し、快感の強さを物語る。絶頂して脱力する鬼灯の艶姿を見て、獄卒たちが厭らしい笑みを向け、手ぬぐいで撫でられて悶える身体を熱っぽく見つめ続ける。

「うっ・・・くっ・・・ううっ・・・」

上半身を這い回る手ぬぐいやザラザラのタオルも的確に、焦らすように性感帯を撫で続け、鬼灯の欲情を持續させ続ける。

ザラつく表面が胸の突起を擦り、上半身がビクと跳ね上がり、そのまま乱暴に擦り回され、鬼灯があっ、あっ、と声を上げる。

全身愛撫はそのまま30分続き、その間鬼灯は十数回も射精させられ、潮を吹かされた。

(も・・・何も考えられ・・・)

絶頂の連続でへトへトになった身体が、それでも快樂には正直に反応をしてしまう。また射精の絶頂が訪れ、鬼灯は声を抑えることもせず、流されるままに愉悅を貪った。

「ああっ！あっ・・・はああ・・・っ」

絶頂で緊張していた身体から力が抜けると、それを皮切りに獄卒たちの愛撫する手ぬぐいの動きが止まった。

「このままじゃまた汚しそうだから、別の洗い方にしようぜ」

一人の獄卒がそう提案すると、鬼灯を大の字に拘束していた触手が動き、天井から伸びた触手が鬼灯の手首を掴んで釣り上げ、触手マットの上に膝立ちさせられ、両足を広げさせられる。

逆△の字に拘束され、見事に白い裸体が360度観察できるようになり、獄卒たちが色めき立つ。

(もっ・・・いい加減に、飽きてくれっ・・・)

絶え間なく与え続けられる快樂に意識を霞ませながら、鬼灯は心の中で叫ぶ。この拷問が苦痛を伴うものならばまだ耐えられる。しかし、快樂責めは鬼灯が最も苦手な刑罰だった。

今まで黄泉で過ごしてこの方、数知れず神経が焼き切れそうな悦を極めさせられたが、いつまでもこの感覚に慣れることができない。快感は鬼灯の理性を奪い、頭を押さえつけ、容赦なく屈服させてくる。鬼灯が火照る体で獄卒たちに恨みをぶつけている間、彼らは着々と鬼灯を躡る次の手管を繰り出してゆく。

獄卒たちは互の手ぬぐいをつなぎ合わせ、一本の長い綱に仕上げた。

「これでしっかりお股を洗わせてもらいますよ」

綱にたっぷりボディソープを染み込ませ、鬼灯の開いた両足の間にくぐらせると、鬼灯を前後に挟んで綱の両端を持つ獄卒が、一気に上へ持ち上げた。

「んぐっ・・・！」

手ぬぐいの綱が鬼灯の中心に食い込み、反射的に腰が跳ね上がる。獄卒たちは具合を確かめるようにグイグイと食い込みを浅くしたり、キツくしたりを繰り返すが、もうそれだけで、鬼灯にとっては絶頂に至る刺激だった。

獄卒たちが鬼灯の淫靡すぎる光景を見ながら、口々にはやし立てる。

もっと食い込ませろ、もっと焦らせ、しっかり洗え、と勝手な事を口にし、鬼灯を責める獄卒たちに指示を与える。

「まずはそれぐらいでいいじゃねえか？」

少し食い込みが浅くなったところで綱は動きを停止し、揺れ続けていた鬼灯の体も止まる。

「じゃあ、擦りますよ・・・」

前後の獄卒は息を合わせ、後ろの獄卒がゆっくりと綱を引っ張ってゆく。

「うあっ！んん・・・くっく、やめろっ・・・」

ヌルヌルの手ぬぐいが鬼灯の性感帯に軽く食い込んで刺激し、ゆっくりズルズルと後ろへ擦って行く。ゾワゾワとした快感が性感帯が密集した両足の間から湧き上がってきて、鬼灯は早くも腰をヒクつかせて甘美な刺激に反応してしまふ。

「ふあっ！？ああ！」

その時突然食い込みが激しくなり、予期せず強く感じさせられて鬼灯の背中が反り返る。手ぬぐい同士を繋げるつなぎ目がコブ状態になっていて、鬼灯の中心を深くえぐったのだ。強く刺激しながらズルリと通過すると、再び緩やかな手ぬぐいの摩擦にさらされるが、やがて繋ぎ目が再び通過し、グイグイと性感帯を引っ掛けながら鬼灯の両足の間を通過してゆく。

「はあ、はあ、はあっ……！」

鬼灯の体がヒクヒクと痙攣し、自身の先端から先走りの液が溢れ出す。緩やかな摩擦と激しい食い込みを繰り返し、前方の獄卒がにぎる綱が短くなった。

「あれ？鬼灯様、感じてるんですか？」

綱を握っている獄卒が鬼灯の顔を覗き込み、誂いの言葉をかける。息を乱し、頭を垂れ、快感に蹂躪された表情が、艶やかな黒髪の間から覗いている。長い睫毛が小刻みに震え、白い美貌が喜びで紅く染まっている。

「んっ……ぐっ……！」

それでも眼前にいる獄卒の言葉に反応し、辛うじて目を開いて潤んだ目で睨みつける。それを見て獄卒は鼻で笑い、グイ、と綱を上食い込ませ、鬼灯の瞳を快感で閉じさせた。

「ああっ……！」

「じゃあ、次は後ろから前へ引つ張りますよ」

ぐい、と綱が中心に食い込み、再び擦り上げが再開される。
手ぬぐいが鬼灯の後ろをかすめたとき、ゾクリと腰に痺れが走り、鬼灯は焦った。

(だめだ、後ろから刺激される方が、ずっと感じてしまう・・・!)

鬼灯の懸念どおり、手ぬぐいは会陰や自身を下から上へ擦り上げて刺激し、前から刺激されるよりも後ろから刺激される方が快感が強かった。

「くあっ・・・!や、やめ・・・」

鬼灯が制止の言葉を口にしようとする、つなぎ目のコブが後ろに強く食い込んだ。

「・・・っ!」

ビクリと跳ね上がる鬼灯の体を無視し、そのままズルズルと進んで奥に前立腺がある会陰を強く刺激し、陰嚢を割り、自身を強烈に擦り上げる。

「んうううっ……！」

甘い痺れが腰で暴れまわり、あやうく絶頂しそうなところを辛うじて鬼灯は堪える。しかし擦り上げは続けられ、中心は容赦なく責め続けられる。鬼灯との接触部分が泡立ち、手ぬぐいの滑りをさらに潤滑にさせてゆく。

(こ、こんな屈辱的な責め、許せない……！)

しかし、性感帯に与えられ続ける快感は止まらず、どんどん鬼灯を絶頂の極みへと追い詰めてゆく。一度目はこらえたが、二度目のつなぎ目コブが通った時、鬼灯はあやうく絶頂を迎えそうになった。ヌルつく塊が性感帯を強く刺激しながら通過し、鬼灯の体からどっと汗が吹き出される。

「はっ……あ……ああ……あっ……」

体を震わせて快楽をこらえながら、両足を閉じようと力を込めるものの、触手でがんじがらめに拘束されていてビクともしない。

「あらら、鬼灯様、また汚しちゃいそうですね」

絶頂寸前で体を震わせ、息を乱す凄艶な鬼灯を見て、獄卒の一人が揶揄する。

「じゃあ、汚す前にとっと終わらせてやろうぜ」

「おい、綱をもっと食い込ませろ！」

「！」

一人の獄卒のとんでもない提案に、鬼灯は戦慄する。

「や、やめ、だめですっ・・・！」

鬼灯の言葉は間に合わず、前後を挟んでいる獄卒は綱をぐいと上に持ち上げた。

「んんっ！」

手ぬぐいが今ままで以上に強く食い込み、性感帯の中心をいきなり強く刺激され、鬼灯の体が弓のよう
にのけぞる。膝から下はがっちりと触手で拘束され、一ミリも体を浮かすことができない。
綱がギチギチと食い込み、それだけで鬼灯の腰にジンジンと甘美な痺れが送り込まれる。

(いけない、このままだと、イク・・・)

体中をヒクヒクと震わせ、今にも快感を爆発させそうな鬼灯の様子を見て、獄卒たちは笑い合う。

「よし、じゃあ思いつきりひっぱれ！」

一人が一際大きな声で呼びかけると、前方の獄卒は笑みを浮かべ、力いっぱい綱を引き寄せた。

「あぐっ！あつあつ、あああああああ！」

ズルルルツと勢いよく綱が引き上げられ、絶頂寸前の鬼灯の体を容赦なく擦り上げる。コブが観面を中心にえぐった瞬間、耐えられず鬼灯は絶頂を迎え、勢いよく自身から精液を迸らせ、泡と一緒に床へ白濁を撒き散らす。

「んあ、ああっ！もう、イツ・・・あああ！」

絶頂の最中でも激しく擦られ続け、鬼灯は立て続けに絶頂させられてしまい、獄卒たちの前で羞恥を晒してしまった。

「あーあ、鬼灯様また汚しちゃったなあ・・・」

一旦責めが終わり、強すぎた快感で未だに体をヒクつかせている鬼灯を眺め、獄卒たちはわざとらしくため息を漏らした。

「はあ・・・はあ・・・ああ・・・」

手ぬぐいは未だに中心に強く食い込み、責めはまだ完全に終わっていない。

※中略※

しかし、獄卒たちはさらに器具を変えて鬼灯の体内を洗浄すべく淫具を用意する。

気を失った鬼灯の後ろに、今度は大小の硬いイボが長く連ねられた数珠縄淫具が挿入された。ビクリと鬼灯の体が跳ね上がり、うめき声とともに鬼灯の顔が再び持ち上がる。

「そういえば、いったらだめって言ったのにイっちゃいましたから、お仕置きですね」

鬼灯は獄卒の言葉に鬼灯が反応を示すが、これ以上動けず、次々と入れられる数珠状の縄にビクビクと身体を痙攣させるだけである。

「ああっ・・・あっ！あうううっ・・・！」

（ううっ・・・身体の中に、異物が入って・・・）

大ききの異なる丸い連なりを差し入れられ、入口が刺激され続けて快感が止まらない。殆どは獄卒が力を入れればなんとか入る大ききのものだったが、中には極卒たちの剛直ほども大ききがある珠もあった。

「んぐっ・・・！やめ・・・ろっ・・・！」

腰を振って獄卒の作業を止めようと試みるが、体内に入った分が内壁に擦れ、おぞましいほどの愉悦が炸裂する。

「ふあっ・・・！あ、あ、ああぐっ・・・！」

ブルブルと身体を震わせる鬼灯の背中を、汗が伝落ちてゆく。体中を汗まみれにして、いつ終わるともしれない数珠縄の挿入が続く。

「エロい拷問だなあ」

その様を眺める獄卒たちがいやらしい笑みを浮かべながら跳ね上がる鬼灯の裸身を眺める。珠を挿れられるたびにゾクゾクと快感がこみ上げ、反射的に身体を震わせると、地面に汗の飛沫がパタパタと飛び散る。

快感は激しくもなく緩くもなく、どちらともつかない状態で鬼灯を責め続けた。時には艶声を上げたが、肩で息をして、なんとか快感をやり過ぎす。

鬼灯への責めがようやく終わり、数珠縄が全て体内に埋め込まれた。

(入ってるだけなのに、腹が灼けつきそうだ・・・っ)

ようやく挿入の責めが終わったというのに、快感は鬼灯を逃さない。体内に入った珠の数々は、動くわけでもないが、体内にあるだけでジンジンと涎が出そうな愉悦を送り込んでくる。

「おお、なんとか全部入ったなあ」

「ふふ、鬼灯様気持ちいですか？中に入れた珠は、こいつら触手の媚薬の原液を飴にしたものなんですよ。早く体から出さないと、体中に強力な媚薬が染み渡って、発狂しちゃうかもしれませんよ・・・」
なんともおぞましい種明かしをされ、鬼灯は戦慄と怒りで唇を噛んだ。血が伝い落ちたが、舌の形をした触手が舐めとり、たちまち傷を癒してゆく。

(こ、こいつら、次から次へとくだらないことばかりっ・・・！)

後ろを振り返って数珠を挿入した獄卒を睨もうとすると、数珠の先を引っ張られ、言葉にできないほどの激感が鬼灯を襲った。

「あああああっ！」

ツプっと一個の珠が抜き出されただけだったが、それだけで怒りに燃える鬼灯の心を折るほどの快感だった。

まだ抜き出た感覚を収めきれず、は、は、と息をついていると、鬼灯の手首に巻きついて拘束していた触手はずれ、カクンと鬼灯の上体が落ち、両手を地に付ける。

四つん這いの格好になったが、快感で手が震えて支えられず、そのまま地面へうつ伏せに這いつくばってしまう。

「あーあ、これぐらいで動けなくなっちゃ、先が思いやられますねえ・・・」

「がんばってくださいよ鬼灯様・・・」

手足の拘束が全て解かれ、反撃に出ることが出来る絶好の機会だったが、体中を渦巻いている灼け付くような快感でろくに動くことができない。動けば、中の数珠が刺激されて、後ろに快感が発生してしまう。顔を上げることもできず地面に突っ伏す鬼灯の周りに、怪しげな触手が集まり始める。

「っ・・・今度は・・・何を・・・っ・・・」

身体の快感を堪えながら顔をあげると、口の中にミミズ状の繊毛をびっしり這わせた赤い触手が、何本もこちらに向かって伸びてくる。

おぞましい尿道責めの動きを備えた触手たちの群れに、鬼灯は戦慄し逃げを打とうと身体を動かしたが、後ろで灼け上がる凶悪な快感のせいで、再び地面に頬を付けさせられた。

「ほら、鬼灯様、お仕置きですよ・・・でも、一回のお仕置きじゃ足りないぐらいたくさんイってたら、ちよつと変わった趣向にしましたよ。うまくいけば、この地獄から抜け出せるかもしれませんねえ」

そう言って鬼灯の上体を起こさせると、数珠を握っていた獄卒が一気に腕を引っ張った。

「あああああああ！！」

一気に四粒の珠が抜け出し、激感が鬼灯を叫ばせる。

後ろでも十分快感を感じてしまうが、数珠が動けば連動して中も擦れてしまう。媚薬の原液がトロトロと溶け出し、内壁を極限まで敏感にさせている中を、異物が擦ればそれは筆舌にしがたい激感になる。

下半身全体が堪らない快楽に支配され、触れられていないのに鬼灯自身も反応し、先端から欲情の液を垂らせた。

「あつ・・・あ・・・はああ・・・つ・・・」

未だに突然与えられた激しい快感に打ち震えている鬼灯に、獄卒が上から言葉を投げかけてくる。

「これから、地面に赤い触手の種を植えますね・・・」

目の前の赤い触手たちが、地面に触手の一本をめり込ませ、種を仕込んでゆく。するとすぐに地面から双葉が顔を出し、グングンと体を縦に伸ばし、驚異的な速さで成長を遂げていく。

「凄い勢いで成長していくでしょ？十五分もすれば、完成形まで育ち切ります。そうなったら、植えた触手全部に責められますよ？鬼灯様・・・」

植えられた触手の数は十本足らずだったが、鬼灯はこの触手の責めの苛烈さを嫌というほどわかっている。

百合の花のように開かれた口の中に存在するミミズ触手は、相手の性感帯を責める極上の感触を持ち、さらに本体から数本を離すことができ、尿道などに侵入して、責める人物を極限まで快楽漬けにし、おぞましいほどの快感でのうちまわらせるのだ。

これまでに数度責められたが、一本だけで十分鬼灯を快楽で打ちのめし、数知れず気絶にいたる絶頂を連続して極めさせられた、恐るべき淫具である。

獄卒は鬼灯を責めている数珠を再び引っ張り、今度は五粒ほど一気に引き抜く。

「はあああああっつ！あああああああ・・・」

鬼灯の体が大きく跳ね上がり、力尽きたかのように再び地面に突っ伏す。大小の異なる灼熱のように感じる数珠が、一気に性感帯を擦り、鬼灯を極悦に引き上げ、引き下ろす。

「はっ・・・あ・・・ああ・・・ううっ・・・」

快感から離された今も、熱がジクジクと体を侵食し、先の激感から開放されても快楽の熱は容易に収まらない。

鬼灯から引き抜いた数珠の端を持った獄卒が、頑丈にそそり立った触手に引っ掛けると、そのままその場へ固定する。

「あつ・・・はあ、はあ・・・」

後ろの入口は快楽で痙攣が止まらず、中は溶け出した媚薬の飴で灼けるように熱くなってきている。身体を動かさずに横たわっているだけで、ズンズンと重い快感が蓄積してゆき、間違いなく僅かなきっかけで絶頂におよんでしまうだろう。そんな快楽の極限状態にある鬼灯に、獄卒が無情にも告げた。

「ほら、早く逃げないと触手に責められますよ？」

獄卒の言葉の通り、ミミズ触手は鬼灯の身体の手前まで迫っていた。

このままここにへたばり続けられれば、間違いなく、また我慢すら許されない激烈な快感を叩きつけられてしまう。

(逃げると、言っても・・・)

上体を起き上がらせようとしただけで、下半身の感覚を支配している数珠玉を意識せずにはいられない。この触手から逃げるには、数珠玉が体から抜け出る激感を堪えなければならぬ。

しかし、身体中が快感でしびれきってしまったている鬼灯には、到底自ら快楽の坩堝に飛び込むような真似はできない。

「おかしいなあ、聞こえてないんですか？早く逃げないと、尿道に触手が入って、射精したくてもできなくて、潮だけ延々吹き続けるようにされちゃいますよ？ほら、あの泣き喚いてたあの責め・・・」

「っ・・・！あっ！あああああああああああ！」

鬼灯の身体は特殊な媚毒のせい、かつて与えられた快感を指摘されるだけでその感覚を鮮明に思い出してしまう身体になってしまっている。

今、鬼灯の身体はミミズ触手に自身を扱かれ、枯れそうになるほど射精させられ、その後尿道に侵入されて射精できず、潮吹き絶頂だけを延々とさせられる快感地獄を、肌の上で鮮明に感じていた。

「はあっ・・・はあっ・・・はあっ・・・は・・・」

快感が静まり、ようやく我に返ったところで、鬼灯は自分の置かれている状況を把握した。

体内に埋め込まれた数珠を動かせば、激悦が身体を走り抜ける。しかし、動かなければこれ以上の責めを施されてしまうのだ。

「んっ・・・っう、くっ・・・」

(こいつら、絶対にミンチになるまで殴り倒してやる・・・！)

熱情の吐息を吐きながら、獄卒たちへの怒りを火種にして鬼灯は起き上がろうと動く。

体内に入っている数珠飴が擦れて、ゾクンゾクンと快感が背筋をくすぐるが、再び突っ伏してしまいそうな両手を叱咤してなんとか起き上がる。

「そうそう、その調子ですよ。それから、あそこがこの地獄の出口ですよ。触手より早くたどり着けば、そのままここから逃がすとお約束いたしましたよ」

獄卒が指差した先に、薄暗い空間が見える。この場所からはかなり遠く感じるが、この地獄から出られるならば一縷の光にすぎるしかなかった。

「ほらほら、早くしないと触手が迫ってきてますよ」

獄卒の言葉どおり、鬼灯の足の指に触手の一端が触れた。

反射的に身体をびくつかせて逃げようとしたところで、体内に埋め込まれた数珠玉が二つ、三つと連続で抜け出し、鬼灯を快楽で強かに打ちのめした。

「あぐっ・・・ああああああつ！」

再び前のめりに突っ伏し、今しがた起こった快感の余韻に打ち震える。下半身がガクガクと震え、体内が炎を飲み込んだかのように熱く、そして疼く。

「は・・・はっ・・・ああ・・・はあ、はあ・・・」

ヒクヒクと震える鬼灯の白磁の臀部を、獄卒の一人が乱暴に掴んで鬼灯に声を上げさせる。

「あああああつ！さ、触るなっ・・・！」

入口の数珠がグニユグニユと動き、内部の性感帯に擦れてただならない快感が鬼灯を連続して襲う。

そのまま獄卒に押され、また一つ数珠玉が入口を通過して外へ引き出される。しかし、今度の珠は通常のものより一回り大きく、ザラザラの表面まで誂られていた。

「はぐううううっ！」

鬼灯の背中が折れんばかりに反り返り、激感の激しさを体現する。ビクンビクンと鬼灯の腰が痙攣すると、鬼灯はそのまま力尽きたかのように再び地面に突っ伏してしまった。鬼灯の腰から地面に白濁が広がり、肛悦絶頂に達してしまったのが見て取れる。はあはあと息を乱し、むせ返るような色香を持つ鬼灯を、ただ獄卒たちは厭らしい笑みをたたえて眺めている。

「鬼灯様イッちまったなあ」

「後ろだけで前もイクなんて、そんなこと本当にできんだな」

「エロいなあ・・・」

獄卒たちの勝手な呟きを遠くで聞きながら、鬼灯は絶頂の余韻を必死に収めようとしていた。

体内の数珠飴はどんどん溶けて内から鬼灯を快感漬けにしてゆく。何もしなくてもゾクゾクと感じてしまう。できれば、これ以上動きたくなかった。

しかし、鬼灯の足首にシュルリと触手が巻き付いたのを感じ、反射的に振り返るとミミズ触手たちがすぐそこまで迫っていた。

予想よりもずっと成長の速度が早い。

鬼灯は焦って上体を起こし、前に進もうとして、また数珠玉の抜け出る快感に声を上げた。

「んああああ！・・・あうう、はあ、はあ、はっ・・・くっ・・・！」

しかし、今度は快感にどっぷり浸るわけにはいかない。足に巻き付いた触手はなんとか振りほどけたが、脅威はすぐそばに迫っているのだ。鬼灯は快楽に覆われそうになる心をなんとか奮い立たせ、再び上体を持ち上げ、前に進んだ。

ツプ、チュ・・・と、淫靡極まる音をたてて、数珠玉が鬼灯の入口を刺激しながら外界へと出てゆく。数珠玉の大きさは不揃いで、ようやく一粒を吐き出したと思えば、つなぎ目で再び硬くすぼまってしまい、感覚に慣れることがない。しかも、次の粒は繊毛つきだったりするから、たまらない。

「くあつ・・・！あつ、くううう・・・！はああああ！あつ、あつ、あああーっ！」

入口と同時に洞内の性感帯も激しく擦られ、灼け付くような快感が鬼灯を襲い、後ろで絶頂を極めてしまふ。

後ろで絶頂を極めれば、快感が収束するまで、刺激されるたびに絶頂を迎えてしまふ。

※中略※

鬼灯から放たれる艶声にも陶醉の色が濃くなり、洗浄と称した獄卒たちの愛撫に溺れようとしている。タオルの愛撫が鬼灯の両足にも及び、足裏から膝、大腿までをヌルヌルと撫で上げ、感じさせてゆく。足の付け根まで無遠慮に動き回る繊維の動きが、ビクビクと鬼灯の身体を感じさせ、興奮を高め、身体は快楽を欲して頭に霞がかかってくる。

「んっ・・・あああ・・・はあ・・・」

鬼灯自身にもヌめる手ぬぐいが張り付き、上下左右に表面を撫で洗い、これ以上ないほどに感じさせてゆく。

「はあああ・・・っ！あ、ああ・・・っ！イク、また、イってしまっ・・・！」

尿道に極細触手を挿入されたままの自身は敏感の極みで、タオルの繊維糸一本一本の動きまで知覚してしまう。さらにそこへ泡のヌルつきが追加され、トロけるような愉悅が鬼灯自身に連続して与えられていた。

「うああっ・・・っ！そこ、そこは、ああああっ・・・！」

最も感じる先端のクビレまで入念に愛撫され、鬼灯が泣き声のような嬌声を上げ、ヒクヒクと腰を震わせる。その姿に欲情をそそられた獄卒が、さらに呵責を激しいものへと引き上げてゆく。

「じゃあ、そろそろ中也も洗っていきますね・・・」

極細触手に泡を擦り付け終えた獄卒が、今度は自分の番だとばかりに身を乗り出し、敏感の極みにあり、最高の絶頂地点である鬼灯自身を責めようと迫る。

「・・・や・・・やめ・・・はうう・・・っ・・・や・・・」

流石にこれから何をされるのか理解した鬼灯は、制止の言葉をあげるものの、体中の愛撫で快感にトロけきった声しか出すことができない。

「おら、気持ちよくなれっ！」

ズブッ！と極細触手が一気に挿入された。

「あああああああああああーーーーー！！！」

鬼灯が小さな口を精一杯開き、身体を折れんばかりに弓なりに反らせて、突如与えられた激感に叫びまくる。突然な快樂の衝撃に、自身から小水のように潮が噴出され、鬼灯の腰やあたりを濡らしてゆく。

しばらく身体が硬直し、ビクビクと痙攣していたが、急にフツと力が抜け、一気に四肢が弛緩した。

鬼灯の瞳が閉じられて涙が頬を伝い、ガクリと頭が転がる。

激悦に耐えられず気を失った鬼灯を見下ろし、獄卒たちが厭らしい笑を浮かべて美しい鬼を眺めている。

「さすがにいきなりはキツかったみたいだなあ・・・」

「そういえば、こっちも入りっぱなしじゃね？」

すっかり力の抜けた鬼灯の膝を掴み上げ、自身の後ろにある秘められた部分を指す。

そこには、脱出ゲームの時に使われた数珠触手が入り込んだままだった。

すっかりこのことを忘れていた数人の獄卒が快哉を叫び、やれ、やれ、と指し示している獄卒に煽り声を掛ける。

「じゃあ、これで目覚めてもらおうかつ！」

身体の外にある部分を掴むと、獄卒はそれを強めに引き抜いた。

その瞬間、鬼灯の身体が大きく跳ね上がり、閉じられた目がいきなり大きく開かれ、口から衝撃と言つて良い快感の叫びを吐き出した。

「つつ！あああああああ！」

ズズ、と三珠ほどが一気に引き抜かれ、尿道責めで忘れかけていた肛悦の悦びを思い出してしまう。

「はあ、はあ、はあ、はあ・・・」

引き抜き終わった今でも鬼灯の身体はヒクヒクと痙攣し、未だに与えられた激感の余韻で下半身を痺れさせている。

「あれ？なんか珠が小さくなってねえか？」

「飴でできてるからなあ。鬼灯様の中で溶けて、小さくなったんだろう」

しかし、飴はただの飴ではない。

鬼灯の身体を強制的に発情させ、絶えず快樂の疼きを湛えた身体にさせている触手の媚薬。その原液を凝縮させて固めたものが、その飴だ。

目に見えて小さくなっているということは、鬼灯の体内に、恐るべき成分が染み渡った証拠である。

その証拠に、身体を洗い始めた頃と比べて、鬼灯の表情が目に見えて淫蕩に緩んでいる。小さな唇は真紅に染まり、頬は桃に染められ、黒い瞳に力はなく、妖しい潤みをたたえている。

汗まみれの体を拭き、素肌に触れると、手のひらに吸い付くような滑らかでしっとりとした極上の手触りとなっている。

その肌の感触を楽しんで手を滑らせれば、その白い身体は鋭敏にヒクヒクと反応し、その敏感さで触るものをこれ以上なく興奮させる。

「ほんとエロいなあ、鬼灯様・・・俺、我慢できなくなってきたよ・・・」

「俺も犯したい・・・!」

剣呑な雰囲気になってきた獄卒たちに対峙して、リーダー各らしい獄卒が野太い声で言い放つ。

「身体の洗淨が終わってからだ！それが済んだら、また飽きるほど抱き潰してやろうじゃねえか」

しかし、そういう獄卒の興奮も最高潮に迫り、早く鬼灯を抱きたくてたまらなくなっていた。戯れに白い下腹に手のひらを滑らせると、ああっ、と呻いて鬼灯が激しく身体を反り返らせる。この敏感さがたまらない。

鬼灯の瞳は快楽に陶醉し、首もグタリと安定感がなく、身体に走る熱を吐き出すのに必死で呼吸を繰り返している。獄卒たちの愛撫にいちいち身体を痙攣させ、声をあげ、鬼灯は彼らの淫らな人形となりかかっていた。

「鬼灯様、もう気持ちいいことで頭がいっぱいみたいです」

「白澤様のことなんか忘れて、俺たちといた方が、ずっと気持ちよくさせてあげますよ？」

獄卒の囁きに、一瞬鬼灯の黒瞳に光が戻る。

「だっ……誰がつ……ああっ！はあ……、おまえたち……なんかとっ……！」

鬼灯の心は未だに屈しきっていないかった。焦点の定まらない目で弱々しく周囲を睨みつけ、吐息混じりに罵倒の言葉を吐く。

これでこそ、鬼灯だ。

簡単に堕ちてしまう相手など、獄卒たちの興味などそそられない。

敏感で快楽に弱いくせに、意思だけは強靱な鬼灯・・・
むせ返るような色香を放ちながら、濃い艶の吐息をつき、それでも矜持は保ち続ける。

「さすが鬼灯様ですね・・・俺たちも、遠慮なく責められるってもんです・・・」

乱暴に鬼灯の黒髪を鷲掴みにして顔を覗き込むと、欲情で潤んだ瞳で力なく睨まれる。その反抗心に加虐心が煽られ、獄卒はゾクゾクと興奮を抑えることができなくなってきた。

「んんっ！あっ！うあああああああ！」

鬼灯自身の尿道に入れ込んだ極細触手を再びひっぱり、鬼灯に快楽の悲鳴を上げさせる。

泡で滑りがよくなった分、触手は勢いよく引き抜かれ、鬼灯は腰が灼かれるような激悦を一方的に与えられてしまう。

「はあっ！はあ、はあ、はあああ・・・」

未だに絶頂の余韻で腰が痺れ、全身へ一気に広がった快感を収めようと、鬼灯が灼熱の吐息を付き続ける。しかし、鬼灯が落ち着くのを待たず、触手は再び自身へと挿入された。

「はああああああ！」

自身で感じているはずの快楽が腰全体に広がり、これ以上ない熱で灼かれる感触だった。しかしその正体は過激を通り越した激烈な快感で、あまりの衝撃に鬼灯は意識を遠ざけてしまう。そのまま気を失おうとしたとき、傍らの獄卒が呟いた。

「後ろの数珠もひっぱちやいましょうか・・・」

一瞬意味がわからなかったのが、致命的だった。

獄卒は鬼灯の中に未だ埋まっている数珠触手の端を掴み、徐々に引き抜き始める。

「ああああああああっ！はううう、あうっ！あっ！ああっ！あああああ！」

チュプ・・・チュプ・・・と珠がひと粒ひと粒ゆっくりと体内から引き出され、挿入されるよりも引き抜かれる方が快感の強い肛悦で、鬼灯が身も世もなく悶え狂う。

洞内は滑らかな飴粒に荒らされ、最佳感帯である前立腺も容赦なく擦りながら通過し、ゾクゾクする入口へと向かい、鳥肌だつような感覚で無理矢理中身を引き抜かれる。

(これダメ、ダメっ・・・感じすぎて・・・ああああ、前も、そんな、両方はっ・・・！)

鬼灯が後ろの快感で連続絶頂を味わっている最中に、自身に施された極細触手まで操作される。

「ああああああ！あああああああああああああ、あっ！あっ！あーっ！ああああ！」

もう、口からは悲鳴しか出ない。

前と後ろで炸裂する暴力的な激悦に、意識を失うことすら許されず、その感覚の全てを余すことなく味わわれる。

上半身をこすり回していたタオルが痛いほど反応している胸の突起を丁寧に捏ね回して刺激し、胸でも絶頂をむかえてしまい、鬼灯の身体は絶頂まみれで快樂の逃げ場が全て塞がれてしまった。

(もう、もう無理、だめだっ……！耐えられない、狂うっ……！)

鬼灯が悲痛な艶声を上げている中、極細触手が素早く抜き差しされ、容赦ない快楽責めを鬼灯に浴びせてくる。

後ろでは数珠玉が緩急をつけて引っ張られ、予想できない動きで鬼灯の洞内を蹂躪し、重すぎる連続絶頂を繰り返させていた。

「んあああ……！ああっ！はああああ……っ！」

「ふふ、もう全部抜いちゃいますから、一気にいきますねっ……」

後ろに潜り込んでいた数珠紐をグイグイと引っ張り、獄卒は一気に力を込めて責め具を引き抜いた。

「ああああああああ……！……っ！」

鳴き声のような鬼灯の嬌声が淫蕩地獄に響き渡り、同時に後ろからジュボジュボと快感源である飴玉が抜け落ちてゆく。

一つ引き抜くだけでも身体中が脂汗にまみれ、腰に重い絶頂を感じてしまうほどだというのに、それを連続して一気に引き抜かれたのだ。

前立腺での絶頂と敏感な入口をこじ開けられ、刺激されながら抜け出てゆく排出の快感に、身体は激しく痙攣し、鬼灯の瞳から涙が止まらない。

「ああ・・・ああ・・・ああ・・・」

あまりの激しすぎる快感に、鬼灯の意識が限界を訴えて気が遠くなってゆく。身体で感じている激悦がどこか他人事のように感じるようになり、身体が宙に浮いているような浮遊感を感じた途端、鬼灯の神経は灼き切れ、最後に極細触手が根元から先端まで一気に引き抜かれた直後、限界を越えて鬼灯は完全に意識を深く消失してしまった。

※中略※

「ああっ！あ、ああっ！」

ぼんやりと物思いにふけっていると、突然胸の突起に待ちかねた刺激が与えられ、鬼灯は情けなくも艶声をあげてしまった。

生ぬるい湯の粒が先端を弾き、ピリピリとヒリつく作用のある湯がじんわりと鬼灯の性感を追い詰めてゆく。

いつの間にかシャワーを持つ手が増え、数人の獄卒がこぞって鬼灯の肌を湯を当てはじめる。

その感覚は過激ではなかったが、真綿でジワジワと締めつけてゆくような、ゆるりとしているが確実に迫る快感だった。

「んっ！んんう！やめっ・・・やめなさいっ・・・！」

「だから、ただ泡を流しているだけでしょ？鬼灯様が勝手に悶えてるだけですから。全く、俺らから見たら滑稽ですよ？」

獄卒たちは互いに笑い合い、鬼灯に屈辱の笑顔を向ける。

確かに言うとおりに、自分は体の泡を洗い流されているだけなのだが、その裏に悪意がなければ自分の身体はここまで敏感になっているはずがない。

シャワーの刺激にいちいち反応していると獄卒たちを喜ばせてしまうので、鬼灯は唇を噛んで、できるだけ快感を堪えようと努めた。

しかし胸の性感帯の両方を同時に刺激され、さらに二本増やされたシャワーの水流が胴体を打つ。

「んっ・・・あ、あぁっ・・・はぁはぁ・・・」

できるだけ声を堪えたいが、肌を走る悪寒にも似たゾクゾクとした快感が、喉を突き上げ、官能の声をあげてしまう。

獄卒たちはシャワーを遠ざけたり近づけたりして強弱をつけたり、上下左右にヘッドを動かして肌を刺激する。

わずかだと感じていたピリピリした感触も、こうも一斉に次々と浴びせかけられると、無視できない刺激となっていた。いや、なまじ絶対的な刺激で無い分、たちが悪いと言って良い。

柔らかな刺激を与えてくるシャワーの水流と、ピリピリした感じが体中で生じ、ジワジワと鬼灯の興奮を煽ってゆく。自分が思っている以上に身体が敏感になっていて、我慢していてもつい、甘い吐息を漏らしてしまう。

胸の突起に再びシャワーが当てられ、強い水流が鬼灯の性感を高めてゆく。

「んっ！くう・・・もう、そこは流したはずですっ・・・！」

「いえいえ、まだ泡がこびりついてますよ・・・」

抗議の視線を向けるが、獄卒は無視して突起に飛沫を当て続ける。ビチビチと水の粒が激しく性感帯を弾き、ゾクゾクと絶頂に至る快感がせり上がってくる。

（水流、強いです・・・っこのまま浴びせられたら、また、イってしまう・・・）

両手を拘束している触手を強く握り締め、せり上がってくる快感に耐える。熱い熱が胴体の中心からこみ上げ、胸へ突き上げ、溶けるような熱が胸の先端で広がり、背中と腰の中心にじんわりと灼けるような熱が広がってゆく。

「んんんんっ！あ、あああああ、やめ、やめ、やめ、あああああ！」

上半身がビクビクと痙攣し、絶頂とともに、やはり想像以上の快感が胸を中心に身体中を駆け回った。

(お、おかしいです・・・身体・・・)

荒い息をついて快感をやり過ごそうとするが、絶え間なく刺激を与えられ続け、消化しきれないうちに新たな快感を与えられ、休む間もない。

シャワーの感触が足首にかかり、ビク、と身体が揺れる。

このまま徐々に上へ上がり、最も触れて欲しくない部分に触れてくるだろうという事を考えると、屈辱と胸の興奮が高鳴ってゆくのを感じてしまう。

胸が高鳴る・・・？

何故だ、こんな屈辱極まる行為を強いられて、身体をいよいよ弄ばれて、怒りこそ湧いて当然なものが、期待に似た感情が湧き上がり、胸のうちが切なくなってくる。

意識すると、触れられていない自身が疼き始め、足に掛かるシャワーの粒を強く知覚してしまう。

予想通り、足首のシャワーは膝に移動し、どんどん足の付け根に迫ってきている。シャワーヘッドを近づけたり遠ざけたりして感触に強弱をつけ、そのたびに無意識で身体が反応してしまう。

口からは熱っぽい吐息が漏れ、自分でも顔が紅潮しているのがわかるほど、頬が火照りきっていた。

「あっ・・・ふうう・・・んっ、やめ・・・ろっ・・・！」

もう片方の足にもシャワーを当てられ、その刺激にまたもや情けない声をあげてしまう。

足に刺激を感じたとき、鬼灯の身体の中心がいきなり脈打った。それは激しい欲情と期待だったが、本人は意地でも認めたくない。

近い部位を愛撫されて、軽い絶頂状態にある自身が、さらなる快楽を求めて疼き始めているのだ。鬼灯にとってはこれだけで十分な快感だというのに、身体はつくづく鬼灯の心を裏切る。

（おかしい、やっぱりおかしい！私の身体が、こんなに感じやすいはずがない・・・！）

しかし、ゾクゾクと這い上がってくる快感と高鳴る鼓動は止められない。

シャワーの飛沫が膝に当たり、その雫が僅かに自身へ跳ね返ってくる。それだけで、鬼灯は僅かに背中を反らせた。

やはりピリピリとした刺激が素肌の上を走り、僅かな刺激だが時折激しく反応し、身体を戦慄かせてしまふ。幾つもの水滴が滑らかな肌を打ち、軽い電気刺激を帯びた水が神経を感じさせるが、正直言つて物足りなかった。

確かに感じるが、手や指や舌で責められるよりずっと緩やかで、身体がもっと強い快楽を欲しがって切ない気持ちにせり上がってくる。

(これ以上、刺激が欲しいなどっ……)

言えるわけもないし、言うつもりもない。元より、自分が快楽を欲しがっていることなど認めたくない。頭が沸騰するほど屈辱的な責めの数々を一方的に繰り出され、彼らの思い通りに快楽を感じたりしたくない。

しかし与えられる快感は刺激的で強烈で、鬼灯の予想を超えた責めの数々に身体は素直に反応してしまふ。

獄卒たちが気持ち悪い目で自分を見ている。

しかし身体を這い回るシャワーの感触がくすぐったくて焦れただくて、身体を悩ましくくねらせてしまう。鬼灯の美しい裸体が水滴で濡れ光り、美しい身体の凸凹を際立たせ、鬼灯という鬼神をより美しく淫靡に演出する。

その姿に獄卒たちはますます魅入り、興奮の面持ちで次々とシャワーを浴びせかける。

激しく素肌を弾く水滴の量が増え、鬼灯の身体がさらに激しく悶える。

首元や胸、脇腹や腹部、腰、足裏、膝、太腿の全てを強弱をつけたシャワーでマッサージされ、ピリピリとした刺激が相乗効果を生み、感じたくなかないのに、性的な快感として刺激を受け入れてしまう。

その原因は、絶えず軽い絶頂を与えられている鬼灯自身にあったが、どうやってもその感覚をごまかすことができない。

先程まで触手を上下に抜き差しされ、その度に長い絶頂感を連続して味わわされて、心は達してしまう事に対して恐怖さえ微かに覚えてしまうほどだった。

責めが終わっても触手は入れたままにされ、鬼灯自身は常に快感を感じさせられている。

射精のない軽い絶頂をずっと感じ続けていて、鬼灯の体は本人の自覚なしに抱かれる準備の整った身体になってしまっていた。

(もう、気持ちよくなんてなりたくありません・・・)

鬼灯が悔しさで歯噛みしていると、とうとう両足を左右に大きく広げられて中心をさらされる。

(シャワーを当てられる・・・！)

鬼灯が懸念したとおり、獄卒は水の出ていないシャワーのノズルを手にとり、鬼灯に話しかけてきた。

「ここに一番泡が溜まってますからね。念入りに流させていただきますよ・・・その間、汚したりしたらまた洗いますから、あまり手間は取らせないでくださいね・・・」

下卑た笑みを浮かべ、獄卒がシャワーから水滴を放ち、反応している鬼灯自身を打った。

「んんんっ・・・！あぁっ！あっ、うっ・・・！やめっ・・・！」

刺激に構えていたというのに、その快感は予想以上だった。

中に触手を入れ込まれた自身は驚く程表面が敏感になっていて、水滴の刺激だけでも腰がトロけそうなのに、ピリピリとした刺激が追撃してさらに鬼灯を感じさせる。

「んぐううう・・・っ！」

横から新たにシャワーを当てられ、水流の強いそれが鬼灯自身を打つと、その刺激で鬼灯は明確な絶頂を迎えた。

自身の先端から精液ではなく、潮が吹きこぼれ、腰を痙攣させて絶頂の快楽を貪り続ける。しかし無色透明の液体はシャワーの水滴にかき消され、極みの証は押し流されてゆく。

鬼灯が絶頂したことに気づかない獄卒たちは、さらにシャワーの水を浴びせかけてノズルを近づけたり遠ざけたり試みている。

(いった、いったから、物凄く敏感になってるのに・・・！)

絶頂直後で、しかも尿道に触手が入った状態で表面をさらに刺激され続けるのは、鬼灯にとって拷問だった。それも甘い拷問。

ピリピリとした水の感触が、恐ろしく敏感な表面を這い周り、鬼灯の腰が跳ね上がる。

(ああああ・・・まさか、またイクっ・・・！？)

予想せず耐え難い快感が腰に這い上がり、我慢できない勢いでせり上がってくる事に、鬼灯は自分でも驚いた。突き刺さるような圧倒的な感触が自身に広がり、そのまま身を抉るように突き抜けてゆく。

「あああああああつっ！あああああ！」

再び鬼灯自身の先端から潮が飛沫いたが、今度は先ほどとは比べ物にならないほど勢いが強く、シャワーの流れに逆らって淫液が吹き出す。かなりの快感だったらしく、鬼灯の背中では絶頂で反り返ったまま、太腿も細かく痙攣している。吐く息は、はっ、はっ、と短く、厳格な眉は垂れ下がり、法悦で黒い瞳は焦点を失い、今にもパタリと閉じて気を失いそうだった。

獄卒たちは中心からシャワーを離し、絶頂した鬼灯の姿を見て笑いあった。

「鬼灯様、シャワーの刺激だけでイっちゃったんですか？エロいですねく・・・」

「こんなに敏感で、まともな日常生活送ってたんですか？」

「ふふ、もしかしてシャワーでいったのは初めてではないんじゃないですか？でないと、こんな大勢の前で派手にイクなんて、恥ずかしいことできませんもの・・・」

(・・・っ！勝手な事をつ・・・)

獄卒たちのからかいの言葉で理性が戻り、自分がとんでもない恥辱にさらされていることを自覚する。

快樂ぐらい、なんだというのだ。とつとついつもの剛力を出して、拘束を振り払い、一人ずつ金棒で百叩きの刑にしなければ・・・

しかし、燃え上がった鬼灯の怒りの炎はすぐに鎮火してしまった。再び自身にシャワーを当てられ、今度は勢いが強く、強烈な刺激を与えられてしまう。

「くううっ！ああ！あっ！あっ！やめ、こんなっ・・・事、必要・・・無い・・・」

「何言ってるんですか、泡はちゃんと落とさないといけませんからね」

「鬼灯様、暴れないでくださいよ・・・」

きつい水流を当てられて、まるでパイプのような刺激が連続して訪れる。さらに表面をピリピリした刺激が通るのだから、時折ひどく感じてしまい、身体を痙攣させて媚態をさらしてしまう。

ザアアとシャワーの流れる音と、鬼灯の上げる荒い息、時折甘い嬌声が淫蕩地獄に響きわたる。

性交では味わえない感覚で自身を責められ、堪え方もわからず押し流されるように絶頂を迎えるが、せき止められた細い出口からは潮ばかりが放たれる。

射精を止められているというだけで自身は硬く張り詰めているというのに、尿道に異物を入れられ、さらにピリつくシャワーの水が僅かに流れ込み、内から鬼灯を感じさせてゆく。

肌に触れる刺激はわずかだが、内から感じる刺激となると、それは衝撃とも言える感覚となって鬼灯を責めあげた。

「あっあっ！あああああっ！」

内側からも最性感帯を責められ、鬼灯が身悶えする。しかしシャワーの勢いは止まらず、息着く暇もなく鬼灯を快楽に浸してゆく。

熱くもなく冷たくもなく、体感温度としては丁度良い湯加減で、最も快感を感じる部分をしつこく水流で責め立てる。胸では僅かに感じていたピリつく感触が、一層敏感な自身では大きな刺激となる。

獄卒たちは水流を強めたり弱めたりして、絶えず感じる感覚を変えて鬼灯を油断させず、いくつものシヤワーであらゆる角度から水流を浴びせられ、連続絶頂で鬼灯の腰は痙攣が止まらない。

これまで獄卒たちや触手にされてきたように、刺すような強烈な快感ではなく、ゆっくりと快楽を高めてゆくような責め方に、絶頂することが当たり前になってしまった身体が打ち震え、余すことなく刺激を拾い、快感を貪ってしまう。

「あつ、あつ、あつ！や、やめつ！んうううう・・・っ！」

両足の拘束は頑丈で、足を閉じたたくても閉じられない。広げられた中心に容赦なくシャワーの水流を当てられ、鬼灯は与えられる刺激のまま絶頂を極めてしまう。

「あああああああつ！・・・ぐっ・・・はあ、あああ・・・っ！」

目を強く瞑り、再び強烈な絶頂を迎え、先端から勢いよく潮を吹き出してしまう。

射精はできないが何度でも絶頂はできるように細工され、感度も普段とは比べ物にならないほど鋭敏にされてしまっている今の鬼灯には、この生ぬるいようなシャワー責めが最も効果的かもしれないなかった。

「あつ！あつ！あああつ！ああ、だめっ・・・！やめ・・・」

「またも絶頂がせり上がり、鬼灯の腰に甘美な快感が一瞬にして広がってゆく。絶頂を迎えるたびに塞き止められている射精感が募り、いつているのにまだイキ足りないという泥沼のような感覚が常に自身へ張り付いている。」

（これだめですっ・・・もう、これ以上いつたら、いつたら・・・！）

「いつたらどうなるのか、などわからない。しかし、それが危険だということは漠然と理解していた。しかし四肢を拘束され、一方的に快感を与えられる続ける鬼灯には、どうすることもできない。」

「あっ、んあっ！あっ！あああああっ！」

再び意識が白くなる程の深い絶頂を与えられ、鬼灯はただただ艶声をあげるだけだった。

「鬼灯様、気持ちよさそうだなあ・・・」

「いつてる顔、すげえ可愛い・・・やべえ・・・」

「俺、声も好きなんだよな。普段は低いのに、感じてる時は甲高くなって、一体どこからこんなやらしい声出してるんですか？」

そうやって、シャワーの水流を鬼灯の喉元に当てる。

ピリピリする感触がぞわぞわと皮膚を刺激し、柔らかな愛撫されているのと同じような心地よさが肌を滑る。

無機質が見ている

※体験版※

※中略※

『鬼灯、してほしい・・・？』

いつもの粗暴な口調とは打って変わって、猫なで声で問いかけ、自らの剛直を見せつける。

鬼灯は今更ながら恥ずかしそうに目を逸らしたが、自身を剛直で一擦りされて、ビクと身体を大きく跳ね上げ、甘えたような嬌声をあげた。

『したい？イキたい？』

そのままゆっくりと互を擦り合わせ、鬼灯に快感をじっくりと擦り込んでゆく。

『くあっ・・・あっ・・・ああ・・・あっ、あっ・・・』

最も敏感で一番気持ちが良い部分を緩く刺激され、鬼灯が口を半開きにさせ、目を曖昧に開いて濡れた吐息を吐く。

周囲でその様子を見ている獄卒たちが、その様子を食い入るように眺めているが、画面を見ている自分も目が一瞬もはなせない。

『鬼灯、このままじゃイケないよ……？おねだりしてくれないと、僕、動くのやめちゃうよ……』

『んっ……ああ……はああ……』

三角巾の獄卒が腰の動きを止めると、鬼灯が理性のない、快感で染められた吐息をもらす。

『気持ちよくなりたかったら、自分で動いたら？』

鬼灯自身に自分の剛直を密着させながら、耳元で囁く。鬼灯は左右に首を振って拒絶したが、再び上下に摩擦が始まり、先ほどよりも盛大に喘ぎ声を上げた。

『ああああっ、はあ、はあ、あああ、あっ！あっ……』

しかし動きは再び止まる。

鬼灯が額から汗を流し、荒い吐息をついて細顎を天に向ける。

『ほらほら、早く動きなよ・・・』

しかし鬼灯は息を乱すだけで体を動かさず、熱っぽい目で自分の下半身を見つめているだけだ。動きたくても、感じすぎて動けない鬼灯の葛藤が、カメラごしにも伝わってくる。

鬼灯の身体は、敏感になりすぎて、発情しすぎて、破裂寸前の風船のように欲情でパンパンに膨らんでいる。

指で軽く弾いただけで、どこまでも遠くへ飛んでしまう張り詰めた風船は、鬼灯の身体そのもので、少しの刺激で鬼灯は快感を極めてしまう。

そんな極限状態の中で、疼きまくる身体を動かせと言い寄るのだ。

鬼灯の口が引き結ばれ、切れ長の瞳から涙がこぼれ落ちる。

艶を含んだ荒い息をしながら、鬼灯は全身に力を入れて、自分から相手の剛直に自身を擦りつけた。

『うううっ』

しかし刺激が強すぎて、鬼灯はたまらず嬌声をあげてそのまま動きを止めてしまう。たったこれだけの刺激で身体全体を発情させ、首筋からゾツとするような艶かしい汗を伝わせる。

『ほらほら、動かないとイけませんよ？』

獄卒は揶揄するが、鬼灯は小さな口から鋭い八重歯を覗かせながら、短く息をついて、返事をするどころではないらしい。

『じゃあ、せめておねだりしてよ・・・僕がその気になるように、ほら』

鬼灯の顔を覗きこみ、三角巾の獄卒が言う。

『んっ・・・く・・・はあ・・・後で・・・許しませんから・・・ねっ・・・』

三角巾の獄卒を他の誰かに見える鬼灯は、悪態をつきながら了承と取れる返答を返した。当然、他の誰かに見える者とは、白澤・・・つまり自分のことだが。

鬼灯は長くため息をつくつと、ぐつと息を呑み、口を開いた。

『・・・して・・・ください・・・』

『え？何を？』

決まりきった文句で返してくる獄卒に鬼灯は苛立ちをほのかに波立たせながら、少しづつ言葉を紡ぐ。

『う、動かして・・・くださいっ・・・腰・・・』

白磁の肌を耳まで紅く染めて、視線を逸らしながら鬼灯が悔しそうに言った。

恥じらう姿も絵になるほど美しく艶めいている。三角巾の獄卒は密かに生唾を飲み込み、鬼灯の腰を抱えて願い通り剛直を上を擦り上げてやる。

『んんんっ！んんん！』

焦らされてずっと疼かされていた器官に快感が再び炸裂し、鬼灯が歓喜のうめき声を上げる。

『もっと擦って欲しいですか？』

※中略※

今の鬼灯は媚毒の効果で手指や舌で愛撫されるより、相手の性器で触れられるのが一番敏感に感じるようになってしまっている。

そんな器官で無遠慮に最佳感帯を弄り回され、激感に鬼灯は下半身を支配されてしまう。その妖艶な姿をカメラがなんの感情もなく撮影し続けていた。

剛直は再び、鬼灯自身を責め始めた。上から強く押さえつけ、上下に激しく擦り、グチュグチュと淫靡な音を立てさせながら、鬼灯を感じさせる。

『あああああっ！も・・・やめ、うううっ！』

鬼灯が切羽詰った声をあげ、摩擦が早まるに連れ鬼灯の背中が反りかえり、一層激しく擦り回されたところで、眉間にきつくシワを寄せ、目を硬く瞑って激しく喘ぐと、身体を痙攣させて再び先端から精液を吐き出した。

『はあっ・・・はっ・・・』

鬼灯を絶頂させると、獄卒は体から離れ、カメラがあられもない格好の鬼灯を正面から撮影し始める。

鬼灯の体全体がフレームにすっぽりと収まり、蹂躪されて乱れ切った姿が余すところなく撮される。先ほど与えられた激しい快感で、未だに白い胸を微かに上下させ、小さい唇を紅く染めて半開きにし、艶めいた吐息を吐き続けている。

襟足の黒髪が汗で首筋に張り付き、白い胸の上には何度も吐き出すことを強いられた、自らの白液がべつとりと張り付いている。さらに伝いおちた部分が、腰で辛うじて引っかかっているだけの黒い着物の部分で何重にも折り重なっている。

広げられた両足の中心は、精液で濡れ光っている以外にも、透明の体液も混ざり合い、一見ただけで激しく弄ばれたとわかる状態だ。

無残に陵辱された淫らな光景だが、それでも鬼灯は美しく、ぞっとするほど艶やかだった。

『鬼灯、挿れてほしい？』

獄卒のまわりつくような言葉に、鬼灯が首を縦にふる。

カメラが鬼灯の顔に迫り、快感の淵で耐えている表情を映し出す。

細い鼻梁に白濁が伝い、閉じられた瞳の長い睫毛から涙がこぼれ落ちている。顔は紅潮し、小さな口からはいつもの八重歯と普段見せない紅い舌が覗き、見ているこちらもゾクゾクと妖しい気分になってくる。

また獄卒が悪戯をしたらしく、鬼灯の顔が快感で歪み、細顎を上に向け、喉をヒクヒクと痙攣させている。

『ほら、もう身体が欲しがって離しませんよ？』

画面が急に移動し、責められている下半身が撮される。獄卒の無骨な指が二本、後ろに突き入れられてゆっくりと出し入れを繰り返して、動きを止めて小刻みに振動させてやると、画面の外から鬼灯の艶声が入り込んできた。

『挿れてほしいんですよ？だったらおねだりしないと・・・』

再び鬼灯の顔が映し出され、長いまつげを瞬かせて光のない目でこちらに視線を向ける。画面の端に三角巾の布が写り、おそらく獄卒の顔の真横にレンズが設置されているのだろう。

鬼灯の視線は獄卒に向けられているが、顔と同じ位置にカメラがあるらしく、ほぼカメラ視線で鬼灯がこちらを熱っぽく見つめている。

『はあ、はあ・・・そ・・・んな・・・』

『疼いてるでしょ？』

『んんんっ！』

鬼灯の目が硬く瞑られ、細顎がヒクヒクと痙攣する。

その表情を見ているだけで、ファインダー越しに覗いている自分身体が熱くなってくる。

『ほら、こっちみて・・・ちゃんとやって？』

ゴソゴソと音が響き、カメラが引かれ、再び鬼灯の全身が映し出される。何度見ても卑猥すぎるその姿に、熱い息がもれてしまう。

『う・・・う・・・っ』

鬼灯は目を閉じ、目端から涙の粒をいくつもこぼしている。哀れにも見えるが、それ以上に加虐心をそそられるその姿に、獄卒たちも同じ意見と見え、四方から手や舌を伸ばして鬼灯の白磁の肌へイタズラに触れている。

『んんっ……！ああっ、さ、触るなっ……！』

全身が性器並みに敏感になった身体がまさぐられ、鬼灯の身体がブルブルと震え、見る間に表情が変わってゆく。

快楽に流されている鬼灯の顔は、淫らすぎてたまらなかった。今までみたこともないその顔に釘づけになり、カメラの向こうの獄卒と立場をかわってもらいたくなる。

『ほらほら、言わないと終わらないよ？』

カメラのマイクにジュ、ジュと淫らな音が拾われ、鬼灯が快楽に打ちのめされた顔をしているところを見ると、また性感帯に刺激を与えられているらしい。

『んっ……く……はああ……』

※中略※

獄卒は自分の身体を挟んでいる瑞々しく白い大腿を掴み、スルスルと撫で回しながら鬼灯を感じさせてゆく。

腰の真下にはそそり立つ獄卒の剛直があり、鬼灯は中腰の体勢でフルフルと震えている。

『そのまま、ゆっくり力を抜いて腰を沈めるんだよ……』

鬼灯の細腰をつかみ、下方へぐいとひっぱり、そのまま自分で挿入するように促す。

鬼灯は獄卒の厚い胸板に両手を付き、その動きに反対するようにして中腰の体勢を保っている。

『そんなことっ……できません……』

顔を紅く染めて視線を逸らす、鬼灯が愛らしく美しい。伏せ気味の長いまつげが震え、軽く噛み締めた口元が婀娜っぽい。

『鬼灯……ほら、身体の力を抜いて、ゆっくり……』

しかし獄卒はその言葉とは裏腹に、自分の腰をはね上げて強引に入口へと入り込んできた。

『あぐっ・・・!』

いきなりの衝撃で鬼灯が逃げを打とうと腰を上げるが、獄卒のたくましい手が腰をつかみ、動くことを許さない。先端が中に押し入り、すっかり快感を貪ることが当たりまえになってしまった鬼灯の身体が、喜びを感知して剛直を素直に受け入れようと柔らかくなる。

『んんっ・・・!あ、あああ、はあああ・・・』

獄卒がさらに腰を跳ね上げ、鬼灯の腰を引き寄せると、剛直は止まることなく鬼灯の中へと入り込んでゆく。

『ふあっ!あぐっ・・・ううう・・・んんっ・・・』

鬼灯が苦悶に近いうめき声を上げるが、顔は快感で紅く上気している。

ん、ん、と可愛らしい声をあげて目を瞑り、ジワジワと襲い来る快感に耐える。眉間にシワを寄せ、長いまつ毛を震わせ、快感を貪る姿は周囲の獄卒たちの視線を釘づけにさせた。

(鬼灯様めっちゃ綺麗・・・)

(エロいなあ・・・早く順番回ってこねえかなあ)

(今度はめっちゃ激しくしてやろう・・・)

かすれた声で交わす獄卒たちの会話がマイクに拾われ、白澤の耳を打つ。鬼灯を幻想で縛っておきながら犯すなんて、最低だ・・・と思いつつも、画面に映る鬼灯は、獄卒たちの意見に同意せざるを得ないほど色香に満ちて美しかった。

『うっ・・・苦しっ・・・』

剛直を根元まで飲み込み、鬼灯がはあはあと息をつく。鬼灯が異物の感触に慣れるのを待たず、獄卒はいきなり激しく動きはじめた。

『うあっ！あっ！待って、待て、あああっ！いきなり、そんな・・・っ！』

鬼灯の身体が上下に激しく揺さぶられ、艶やかな黒髪が跳ね飛んで乱舞する。

最初は戸惑いを隠せない声を上げていたが、しばらくすると甘さを含んだ艶声へと変化していった。

『あつ！はあつ！ああつ！あ、あああつ！』

ガクガクと揺さぶる激しさが増し、鬼灯は両手で獄卒の胸板にすがり、体勢をなんとか維持する。

『やつ、やめ・・・あつ！はげしっ！くう、過ぎっ・・・！』

グチュグチュと粘膜が激しく擦れる音が周囲に響き、性交の激しさを物語る。敏感すぎるようになってしまった鬼灯の身体は、突き上げられると挿入を拒むように収縮し、引き抜けば逃さないように張り付いてくる。

極上の蜜壺に自分の分身を挿れ、好き勝手できるとあらば、これほど激しくなってしまうのは雄として当然かもしれない。

『これぐらい、我慢できるでしょ？もっと、凄いいこと、たくさん、されてたじゃん・・・』

『うあつ！あつ！あつ！ああああああ！』

鬼灯の背中が大きく仰け反り、ブルブルと身体中を激しく痙攣させる。指摘されれば過去の快樂が蘇ってくるという因果な媚薬を使われ、その効果はまだ継続中だった。

一体いつの責めを思い起こしているのかはしれないが、これまでのどの責めをとっても鬼灯には過ぎた快感だった。

『ふうっ！はあ！あっ！あああ！はげっ・・・しっ・・・！！ああっ！』

獄卒の絶頂が近いのか、腰使いがさらに激しくなり、鬼灯の身体が一層激しく上下に揺れ動く。背後から別の獄卒の手が伸び、揺さぶられるまま先走りをごぼし続ける鬼灯自身を掴んだ。

『あっ！あああ、はあ、そこはっ・・・！！ああっ！』

手を動かさなくても手のひらで軽く包んでいるだけで、激しく上下する身体につれて、鬼灯自身も上下に擦れて快感をさらに上乘せされてゆく。

『ああああああっ！も、もう、私、いっ・・・』

『イク？いいよ、イって、鬼灯・・・』

※続きは製品版でお楽しみ下さい※